

看護実践者として 事例研究に取り組んでみて

2017/12/16

佐藤美雪（訪問看護ステーション けせら）

研究の経過

2015年	12月	A氏のお看取り。いい看取りだったけど、看取りを終えた後もなんとなくモヤモヤして、形にしてみたいと思っていた
2016年	7月	「看取り」をテーマに研究者からのインタビューを受ける機会を与えられた。 →A氏からのメッセージのように感じられた。 6年間の訪問看護の見直しからA氏に絞り1年間の振り返り、研究対象の1ヶ月に絞るまでに2か月。この間、2週に一回の面接、メールのやり取りを行い、11月23日の事例研究発表に向けてまとめを進めた。
	11月	第一回Long-Term Care Quality研究会で発表
	12月	主治医と面接、山本先生野口先生と面接
2017年	1月	長女さんのお宅への訪問、ここまでの一連は「旅」と称して、本来の研究の流れと別に動いた時期
	2月	分析会を経て、秋の論文投稿・学会発表を目標に時にゆっくりになりながらも2週間に一度ペースでメール、月に一回の面接を重ねた。
	10月	投稿用の論文を完成させ、論文投稿！

私が大事にしてきた「場と言葉」

- 訪問看護で関わる人との出会いや語りに興味があり、その人の**生の言葉を残す意味、場が持つ意味**を考えている。
- 記録においては特に言葉のやり取りはあまり重要視されていないように感じ、その点は記録に残されるよりも、職場の中で看護師同士の言葉の報告になっており、**流れていってしまう**ように感じている。
- **場と言葉に看護実践のキモが含まれており**、これを形にしていくと「**実践を形に**」が目に見える形になるのではないかと考えていた。

形にする方法がわからない

- 「場と言葉」にこだわった時に出会ったのが**ベナーの看護論**
- この考え方は何かを見ていくと**現象学**に行き着いた
- 現象学とはなんぞや、を模索していた時に事例研究に取り組む提案を貰った

事例研究が面白い！

- 自分がわかりたい、明らかにしたいと思ったことが形になっていく過程が目に見えたこと
- 明らかにする過程で文献に触れることで発見があること
- 他の人に「面白い！」と言って貰えること
 - 研究の開始の時は何が面白いのか全くわからなかった

事例研究をして感じたこと

今自分の中に研究をしてきて感じている3点

- ①自信がつく（自分の実践の意味がわかるから）
- ②照らしあわせる芯ができる（自分の真ん中に形ができる）
- ③応用ができる（既存の概念や感情を棚上げして何をしたかに焦点をあてる経験は使える）